

平成二十九年 度	土佐中入試	第一日	国語 A	四枚のうち 一枚目	番号	氏名
----------	-------	-----	------	--------------	----	----

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(設問の都合により、一部に表記を変えたところがあります)

私は^{てつかく}哲学の勉強をして、その成果を発表したり、それを学生に教えたりするのが仕事であるので、年がら年中、勉強ばかりしている。しかし、その勉強はたとえば自分が高校生の時にしていた勉強とは少し^{ちが}毛色が違う。というのも、人に教わったり、^aシドウされたりすることがほとんどないからである。そうした事情もあって、私はあるときから、なぜ人に勉強を教わる必要があるのだろうか^{まこと}と真剣に考えるようになった。

高校生ぐらいまでは、^bギョウセイリヨクがなくても自発的に一人で勉強をし続けることができる人間は決して多くないので、勉強への取り組みを促すことが教師の主たる役割の一つとなる。したがってそこでは先のような問いが問われることはほとんどない。しかしそれは勉強への取り組みをたえず促されている^c彼らにとつてこの問いが無意味であることを少しも意味しないのであって、学ぶ側からすれば、なぜ誰かから教わる必要があるのか、自分一人で勉強しても構わないのではないかという問いは常に問いうるのである。最近、この問いについて思うところがあった。私はこのところずっと古典ギリシア語を勉強している。これを教わるために、^dコウの^eない土曜日の午前、毎週、語学学校に通っていた。数ヶ月が過ぎたあたりで^e予習と復習が大変になっていき、仕事との両立が大変であったが、半年を過ぎるとかなり^f働くようになっていった。毎週学校に通って何かを教わるというのは久しぶりの経験であり、久しぶりであるが故に、「教わる」ということについて考えを深めることができた。

誰かに教わるということについてポイントとなるのは、教わる側が、教えられている^g明示的な内容以上の何かを受け取っているということである。¹ギリシア語の動詞の活用はギリシア語の教科書に書いてある。ならば、^hX

とも思えるのだが、それは教わるという経験を具体的に想像していないが故の感想に過ぎない。

なぜなのかをⁱ頑張って説明してみよう。A、B、C、D、Eという五項目からなる教科があるとする。生徒は当然、Aから順にEまでの項目を教わる。したがって、AからEまでを教えてもらえるなら、誰に、あるいは何に、どうやって教わってもいい気がする。単に教科書を読むだけでもいいかもしれないし、毎回違う人に教わってもいい気がする。

²実際に、一人の教師から教わっていると、単にAからEまでを頭に入れるのとは異なったことが起こる。というのも、教える側には、その教科に対する態度や精神、やや大袈裟に言えば、思想のようなものがあるからだ。五項目のうち、AとCとEに力点を置いて教科を^j把握する教師もいるだろうし、AとDに力点を置く教師もいるだろう。教師ごとに力点が異なるのは、それぞれの教科把握の^kハイゴに何らかの思想があり、それに基づいて、「ここがポイントだ」と考えているからだ。

³AからEまでの五項目を教わる際、教わる側はその五つの内容以上のことを受け取っている。AとCとEに力点を置く^l全体がこう見えるとか、AとDに力点を置けばEは自然と理解できるとか、そういう把握の仕方を教わっているのだ。⁴この^mスイジュンこそ、誰かにものを教わるという経験において最も重要なことである。教わった複数の内容が相互にⁿいかなる関係を有しているのか。それを十分に把握できた時、人はその内容を^o体得したということができるからである。

教える側の教科に対する思想が高度に磨き上げられていれば、教わる側は勉強しやすいであろう。だから、それを磨き上げることが教える側の課題になるわけだが、この思想というのは教科の明示的な内容に対する理解を深めていった結果として得られる、いわば^p副産物のようなものであって、それ自体の磨き上げを目指すことは難しい。これはたとえば、仕事をきちんと達成しようと努力することはできても、仕事達成の結果として身につく自信そのものを得ようとして努力することはできないのと同じである。

こうして考えると、教えたり教わったりするという関係には、ある意味で^q神秘的なものが関わっているような気がする。なのであり、それが日常的に行われているということが不思議に思えてくるのである。(國分功一郎「誰かに教わるといふことについて」)

【注】 ※ 哲学……人生や世界、物事の基本となることをきわめる学問。筆者は大学で哲学を教えている。
※ 把握……正しくしっかりと理解すること。

問 1 線部 a～e のカタカナを漢字に直しなさい。

a	b	c	d	e
---	---	---	---	---

平成二十九年 度	土佐中入試	第一日	国語 A	四枚のうち 三枚目	番号	氏名
----------	-------	-----	------	--------------	----	----

問 6 ——— 線部④「明示的な内容」に当たるものとして最も適当なものを次のア～オより選び、記号で答えなさい。

- ア その教科のポイント
- イ 暗記すべき項目の本質
- ウ 教わるべき内容そのもの
- エ 誰が聞いても明らかな説明
- オ 教科の中のいくつかの重要項目

☐

問 7 空らん X に当てはまる言葉を次のア～オより選び、記号で答えなさい。

- ア 学校なんか必要ないではないか
- イ それを読んで覚えればいいではないか
- ウ だれかに読んでもらえばいいではないか
- エ そのまま次の項目へ進めばいいではないか
- オ そんなことは最初からわかっているではないか

☐

問 8 ——— 線部⑤「頑張って説明してみよう」の「頑張って」には筆者のどのような気持ちがこめられていますか、説明しなさい。

問 9 ——— 線部⑥「体得した」とありますが、「体得」という言葉の意味として最も適当なものを次のア～オより選び、記号で答えなさい。

- ア 身をもつて体験すること
- イ 自ら納得して受け入れること
- ウ 自分の心に思いうかべること
- エ 人に教えられるようになること
- オ 自分で経験して身につけること

☐

問 10 ——— 線部⑦「神秘的なものが関わっている」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オより選び、記号で答えなさい。

- ア 人が教えたり教わったりすることは予想を超える様々な可能性をふくんでいて、非常に奥が深いものであるということ。
- イ 教えたり教わったりすることによって、人はそれぞれが持っている能力を限りなく伸ばしていけるものであるということ。
- ウ 人が教えたり教わったりすることにはいくつもの方法があり、どの方法を選ぶかによって結果が大きく違ってくるということ。
- エ 教えたり教わったりすることは偶然の出会いによるものであり、いい先生に出会うことはとても幸せなことであるということ。
- オ 教えたり教わったりすることは、人間だけにあたえられた不思議な能力であり、機械にはまねのできないものであるということ。

☐

平成二十九年 度	土佐中入試	第一日 国語 B	五枚のうち 一枚目	番号	氏名
----------	-------	----------	--------------	----	----

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(設問の都合により、一部に表記を変えたところがあります)

私(瑞穂)は祖父入院の知らせを受けた。そのとき私の脳裏に赤い花の光景がぱつと浮かんできた。その光景が何なのかをずっと特定できないまま、私は三度目の祖父の見舞いに訪れた。

次に面会に行ったとき、祖父は急速に衰えて、一日の大半を眠って過ごすようになっていた。祖母から容態の説明を受けながら、私はきつと泣くまいと心に決めた。そう決めておかなければ泣いてしまうかもしれない。働きづめで身体を壊し、入院してから初めて駆けつけて泣くようなつまらない娘と孫しか持たない祖父が不憫だった。

それなのに、祖父の寝顔は思いがけず穏やかで、折れそうな気持を支えてくれる。

「今まで休まなさすぎたんだよ、少しゆっくり休んだらいい」

動揺が少し落ち着いたらと、私は祖父にささやいた。聞こえているのか祖父の頭が小さく揺れる。

「それでまた元気になったら、いっぱい働けばいいじゃない」

あわててつけ足す。祖父ならそれを望むと思っただけだ。

すると、祖父は目を覚ましたらしい。うつすらと瞼を開き、私を認めてかすかに微笑んだ。唇が薄く開く。何かをいおうとして震える。

「なに? じいちゃん、水?」

祖父の口もとに耳を近づけると、祖父は小さい声で、でもはっきりといった。

「……キト」

「え、ごめん、なんていったの」

「キト」

よく聞き取れない。困って傍らの祖母に助けを求めようとしたその瞬間、あ、と思った。キト。するすると記憶のファイルが開いた。むかし、祖父の口から何度も聞いたキト、街の名前だ。

「そうだ、じいちゃん、よくキトのこと話してくれたよね」

古いファイルの中から、街の名前と、高い山と、抜けるような青空、甘い香りを放つ赤い花が飛び出してくる。

「キトで遊んだの、楽しかったね」

祖父は満足そうにうなずいた。

祖母の家にアズけられていた頃のことだ。祖父は夕餉の後、私を膝の上に抱えて、キトという街の話をしてくれた。

その街は古代から栄えた都市で、赤道直下にあるのに、標高が高いため暑くもなく寒くもない。一年中気温が安定していて、晴れた空には富士と見紛う美しい山がそびえている。めずらしい鳥が飛び交い、鮮やかな花が咲き乱れ、木々には赤い大きな実がなっている。祖父は A 見てきたかのように街の様子を話し、オサナかった私は夢中で聞いた。その街の澄んだ空気を胸いっぱいについた気がする。

祖母の家を離れてからも、キトは私をなぐさめてくれた。母の帰りの遅い晩、ひとりで蒲団に入って空想の街で遊んだ。その街にはちょうど私と同じ年頃のきれいな女の子も住んでいて、すぐに仲よくなつて走りまわった。さびしいときはいつでもキトへ飛べばよかった。

その、キトだ。いつから忘れていたんだろう。長い間、思い出すこともなかった。赤い花の影が脳裏に浮かんでからでさえも、レング草までしか遡ることができなかった。祖父は今、静かに眠っている間にキトで遊ぶことができているんだろうか。それは、いいことなのか、さびしいことなのか、私にはわからない。

今夜はそばについていたいという私の申し出は母に却下された。

「だいじようぶ、すぐにどうこういうことはないって」

私の背を押す母の目には光がない。

「それより、ばあちゃんをお願い、瑞穂がすっかりついていてあげて」

そのとき、祖父が何かをいった。

「なあに? じいちゃん、どうしたの?」

「@ベリカード」

祖父がかすれた声を出す。

「ばあちゃんに聞け。ぜんぶおまえにやる」

そういつて祖父はまた目を閉じた。なんのことだかわからなかった。ばあちゃんに聞けといっていたけど、聞かれた祖母だって困るだろう。

「キトやと、懐かしいのう」

「キトやと、懐かしいのう」

「キトやと、懐かしいのう」

「キトやと、懐かしいのう」

「キトやと、懐かしいのう」

「キトやと、懐かしいのう」

平成二十九年 度	土佐中入試	第一日	国語 B	五枚のうち 二枚目	番号	氏名
----------	-------	-----	------	--------------	----	----

「ばあちゃん、キト、覚えてるの？」

◎祖母は意外なことをいった。

「覚えてるものなも、キトやろ、忘れたりせんわ」

「キトって、むかし、じいちゃんが話してくれたお話に出てくる街だよな？」

「ほや、きれいな街やったの。エクアドルの首都やとの」

「エクアドル？ って、南米の？」

「赤道直下ちゆうてたな。ほや、ベリカードやったの、えんと、銀の缶に入ってたはずやけど」

祖母は黒光りする筆箱の抽斗を上から順に開けはじめた。◎私の中のキトがぐらりと傾ぐ。

「キトって、じいちゃんの頭の中の街じゃなかったの」

自分の声が聞き取れない。たしかに、キトはあった。祖父の頭の中だけでなく、私の頭や胸やきつと血液の中にもキトは入り込んでいただろう。祖母も、もしかしたら私たちふたりの会話を聞いていたかもしれない。だけどそんな話とは明らかに違う。キトはエクアドルの首都だと祖母はいつたのだ。

「あったあった、これや」

錆の浮いた銀の平べったい缶を大事そうに取り出し、祖母はそのまま私に手渡してくれた。

固い蓋をこじ開けると、中に絵葉書大のカードが詰まっていた。端が薄茶色に「ソ」まっっているものもあり、ひと目で古いものだと見て取れる。これがそのベリカードか。いちばん上の一枚を手に取り、裏を返した私はあつと声を上げそうになった。

キト。キトだ。胸の中にあつたあの街にそっくりの風景がそこに写っていた。富士に似た、でもさらに鋭角な尾根が、青々とした空を背景に礫とそびえ、手前には澄んだ大きな湖がその姿を映している。

「キトってほんとうにあつたんだ」

夢の中の出来事がほんとうだったと知らされたような、祖父とふたりだけでつくった架空の街が「白田の下」に曝されるような、緊張と弛緩がないまぜになってやってきた。

「ベリカードって、なに？」

そう聞く声がかからに乾いている。思わず唾を飲み込んだ。

「ラジオ聴くやろ、ほの内容を書いてラジオ局に送るんや。ちゃんと聴いてたことがわかれればラジオ局がベリカードを送ってくれる」

受信の証明書のようなものと思えばいいだろうか。青い鳥の写真が印刷されたカード、見たこともない果物の写ったカード、満面の笑みをたたえた少女のカード、そして、赤い花のカード。

祖母が隣に腰を下ろす。

「懐かしい。これも、ああ、これもや、ぜんぶじいさんと集めた」

アンデスの声、と日本語で記されている。キトのラジオ局の名前らしい。

「何の番組に周波数を合わせようとしてたんやつたか、たまたま飛び込んだ声があつての」

そういつて祖母は「目尻に皺を寄せ、手元の赤い花のカードをじつとのぞき込む」

遠く離れた日本の片田舎で、祖父のラジオがエクアドルからの電波を受信する。現地の日本人向けの放送を偶然つかまえたのだろう。

祖父と祖母はたぶん地図を開いてキトの場所を確かめた。そうして地球の反対側まで、拙い受信報告書を送った。ベリカードが返って

きて、ふたりは心を躍らせる。幾度も放送を聴き、幾度も報告書を書く。そうして一枚ずつベリカードが「ト」けられる。ふたりして

目を輝かせてカードに見入ったことだろう。

そのときの様子がありありと目に浮かぶ。私を膝に乗せて話してくれたのは、たぶん祖母とふたりでじゅうぶんに楽しんだその後だったに違いない。どこにも出かけたことのなかった祖父母に豊かな旅の記憶があつたことに私は驚き、◎やがて甘い花の香りで胸の中が満たされていくのを感じていた。

(宮下奈都『遠くの声に耳を澄ませて』)

【注】 ※ 不憫……かわいそう。

※ 夕餉……夕方の食事。

※ 見紛う……見まちがえる。

※ レンガ草……赤紫色の花。祖父母の家の庭先に一面に咲いていた。

※ 弛緩……ゆるむこと。

問1 線部 a～e のカタカナを漢字に直しなさい。

a	け	b	かった	c	った	d	まっ	e	け
---	---	---	-----	---	----	---	----	---	---

平成二十九年 度	土佐中入試	第一日	国語 B	五枚のうち 三枚目	番号	氏名
----------	-------	-----	------	--------------	----	----

問2 〰〰〰線部Ⅰ「白日の下に曝される」、Ⅱ「目尻に皺を寄せ」の本文中の意味として最も適当なものをそれぞれのア～オより選び、記号で答えなさい。

Ⅰ 白日の下に曝される

- ア 明白なものとして退けられる
- イ 実在するものとして否定される
- ウ 日常的なものとして感じられる
- エ 現実のものとして明らかにされる
- オ 証拠のあるものとして認められる

Ⅱ 目尻に皺を寄せ

- ア 思い出そうと顔をしかめ
- イ 思わず涙しそうになつて
- ウ 懐かしがつて笑みを浮かべ
- エ 遠くを見るように目を細め
- オ カードを見ようと目をこらし

問3 〰線部①「祖父は小さい声で、でもはつきりといった」とありますが、 〰線部②には「よく聞き取れない」とあります。なぜ私は「よく聞き取れない」かつたのですか、その理由を説明しなさい。

問4 〰線部③「飛び出してくる」という表現の説明として最も適当なものを次のア～オより選び、記号で答えなさい。

- ア 記憶がファイルの中に収められているという表現を受け、「飛び出す」という危険なイメージを持つ述語を用いて、記憶がぶつかり合っている状況を効果的に示している。
- イ 記憶がファイルの中に収められているという表現を受け、「飛び出す」という勢い良く外へ飛び出る意味の述語を用いて、記憶があふれ出てくる状況を効果的に示している。
- ウ 記憶がファイルの中に収められているという表現を受け、「飛び出す」という本来人間の動作を示す意味の述語を用いて、記憶を呼び起こそうとしている状況を効果的に示している。
- エ 記憶がファイルの中に収められているという表現を受け、「飛び出す」という空中へ上つていくイメージを持つ述語を用いて、記憶がどんどんなくなっていく状況を効果的に示している。
- オ 記憶がファイルの中に収められているという表現を受け、「飛び出す」という無意識な動作を示す述語を用いて、記憶がいつの間にか美しいものへと変わっている状況を効果的に示している。

問5 空らん A に当てはまる言葉を次のア～オより選び、記号で答えなさい。

- ア もしも
- イ たとえ
- ウ 少しも
- エ どうか
- オ まるで

平成二十九年 度	土佐中入試	第一日	国語 B	五枚のうち 五枚目	番号		氏名	
----------	-------	-----	------	--------------	----	--	----	--

問10 ――線部⑧「やがて甘い花の香りで胸の中が満たされていくのを感じていた」とありますが、これは「私」がどのような気持ちになっていたことを表していますか。本文全体をふまえて説明しなさい。

[illegible]

問11 この文章の内容の説明として最も適当なものを次のア～オより選び、記号で答えなさい。

ア 病室で私が差し出した水を飲んだ後、祖父は目を覚まし、「キト」という言葉を口にしました。

イ 祖父母の家にあずけられていた頃、ひとりでさびしい私は、キトという空想の街になぐさめられた。

ウ 今夜は祖父の病室で泊まりたいと言ったが、母は祖母の体調不良を理由に、私の申し出を却下した。

エ 祖母から渡された缶の中の一番上のペリカードには、私がかつて心に思い描いたキトの風景があつた。

オ 心を躍らせて何度も放送を聞いた祖父と祖母が、実際にキトを訪れていたことを、私は後から知った。

